

橋本ゼミ 読書課題

01155125 横山眞理

岩波文庫 牛乳屋テヴィエ

この本は、ユダヤ教徒であるテヴィエが、ショレム・アレイヘムに語りかけるような文章で構成されている。内容はとても頭に入りやすいが、そのかわりに本の終盤になるにつれて退屈になってくる。

ユダヤ教徒であるテヴィエの出来事がこの本には書かれている。急に大金が入ったのはいいが、騙し取られたり、娘にある男との結婚を勧めるが娘に拒絶されたり、違う娘が異邦人と結婚する、など、ユダヤ教徒のテヴィエからすると頭を悩ませる出来事もあった。

私が今回この本を選んだのは、私がキリスト教徒であり、ユダヤ教徒が日常で読む旧約聖書についてある程度知識があったからである。他に選んだ2冊も同様の理由である。

テヴィエはショレム・アレイヘムへの手紙の中で、よく聖書の言葉を持ち出すが、言葉の使い方が合っていない。聖書の言葉は新約、旧約どちらも学びを通さなければ難解であることが多い。テヴィエは最初の方は貧しかったことから、旧約聖書の解釈について聴くことができなかつたのではないか、と思った。聖書について牧師や伝道者が語ることを説教という。しかし、大金が入ったあとにこの手紙を書いていることから、説教を聴く権利に財産の有無は関係なく、単にテヴィエが聖書解釈についての知識が欠けていただけなのかもしれない。また、ユダヤ教徒同士で聖書について語る場面も多くあったであろうに、他の信徒はテヴィエに注意することがなかつたのだろうか、と疑問に思った。

さて、テヴィエはある日大金を手に入れる。森を迷っている婦人2人を助けたところ、その2人が大層裕福であつたらしく、大変な謝礼を貰つたのだ。印象に残っているのは、テヴィエが謝礼として三リーブル欲しい、という意味で「三枚くださいーい!!!」と言つたところ、ご主人方に笑われて、100リーブルを貰つた場面である。人によって、金銭感覚は違ふと感じた。しかし、この金銭感覚というのは貧富の差で違ふ、というよりは人それぞれの価値観によって異なると私は思う。おそらくこの場面では、テヴィエと婦人達の家所得があまりにも違ふために金銭感覚が異なつているのである。ここで普通は主人公であるテヴィエが大金を手に入れることで、読者も良い気分になるはずなのだが、婦人2人を助ける際、テヴィエが散々渋つたため、テヴィエには良い印象がなく、良い気持ちにはならなかつた。

その100リーブルを使って、テヴィエは新しくチーズやバターを売り始める。商売が軌道に乗り始めた頃、ある男から、お金を割り増しして返すから、100リーブルを預けないか、と声を掛けられる。今でもこのような事を提案してくる人々は存在するが、普通は怪しすぎてこの手に騙される者はいない。しかし、テヴィエは騙され、100リーブルを奪われてしまう。この時ばかりは私もテヴィエに同情の念を禁じ得なかつた。急に大金を手にし、欲がでてしまったのであろう。しかし、100リーブルを失つても絶望しないテヴィエに私は感心した。

肉屋にレイゼルヴォルフという男がいるのだが、彼からテヴィエの娘であるツェイトルを嫁に欲しいと言われる。レイゼルヴォルフとツェイトルは歳が離れている。テヴィエは娘に結婚を勧めるが、娘は予想外にも拒絶をする。この時代でも、よく知りもしない男と結婚するには嫌悪感があるのだな、と思った。その娘には結婚を約束していた仕立て屋の青年がいた。テヴィエは悩んだが、仕立て屋は好青年であるし、無理矢理嫌がる娘を結婚させるのは酷だと思い、娘と仕立て屋の仲を優先した。この場面で、私はテヴィエを見直した。都合を考えて結婚を決めるのではなく、娘の幸せを考えるテヴィエは父親らしいと感じた。

長女の問題が解決したと思えば、次に次女の問題が出てくる。次女、ホドルは父親に了承も得ずにフェフェルとの結婚を決めてしまう。結婚するというものは仕方がない、とテヴィエも了承するが、革命運動に参加していたフェフェルは、いずれ遠くの地で投獄されることとなる。その際、次女ホドルも彼の元へ行く、と言い出す。一時は狼狽えたが、そんなことがあっても文中では冷静であるテヴィエはユダヤ教徒らしい、と私は感じた。どんな宗教の信徒にも通じることなのかもしれないが、この世の問題を大して深刻には受け取らない傾向があるように思える。大切なのはこの世の事象や問題ではなく、死んだ後の世界なのだ。

最もテヴィエを悩ませた問題は三女、ハヴァの結婚である。彼女の結婚相手、フフェトカは非ユダヤ人なのである。ユダヤ人であるテヴィエにとって異邦人との結婚は受け入れがたいことである。反対を押し切りフフェトカと結婚したハヴァを、テヴィエは許せず、死んだことにする。長女、次女の結婚を許したテヴィエでさえ、異邦人との結婚には憤りを覚えることを考えると、当時、異邦人との結婚は非常識であったのだと思う。テヴィエにユダヤ人としてのプライドがしっかりあるということを再確認した。時代が違うため、感覚はわからないが、テヴィエの憤りから律法主義を感じた。律法主義とは律法を守ることで救いに至る、という考え方である。

現代のクリスチャン、またはイスラム教徒や仏教徒にも、このような傾向は見られる。クリスチャンはクリスチャンと結婚するのが普通である、という価値観があるのだ。私の教会の兄弟姉妹、同じ信仰を共にする者をキリスト教徒は兄弟姉妹と呼ぶのだが、の中にノンクリスチャンと将来結婚したい、という者はいない。あろうことか、クリスチャンではない人とは絶対結婚したくない、と考える者もいる。ノンクリスチャンには無宗教も含まれる。無宗教ならばまだ良いが、テヴィエの時代の人々は何かしらの信仰を持っていることが多いので、異邦人、つまり異教徒と等しい者との結婚を嫌悪するのも当然のように思える。

私は異教徒に偏見を持っているつもりはないが、テヴィエの反応を不思議に思わないところを考えると、多少なりとも他宗教に対して穿った見方をしているようである。クリスチャンとしての誇りは持ちつつ、適切に他者と接することができるように努めていきたいと思う。

岩波文庫 ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか

この本の筆者、内村鑑三は私達が通う北海道大学の先輩にあたる。武士家に生まれた内村は札幌農学校、現北海道大学に入学し、半ば無理矢理キリスト教に入信させられる。しかし仲間と時を過ごすにつれ、キリスト教徒として信仰心を深めていく。無信仰の人々を無知と見なし、日本を信仰心の面で遅れているとしていた内村だったが、キリスト教国として理想の国であると考えていた米国へ渡り、現実を知る。米国に蔓延る悪を目の当たりにした後、日本へ帰国し、宗派にこだわらないキリスト教徒として生きることを決める。これがこの本の大筋である。この本の良いところはキリスト教に全く触れたことのない読者のために、専門用語には注釈がついてあるところである。また、キリスト教についての内容だけではなく、学生時代の青春の描写や海外に出た際の文化の違いへの衝撃など、私達にも共感できる場面があるので、キリスト教に全く興味がない人でも楽しんで読むことが出来るのではないだろうか。

第1章では内村の生まれについて書かれている。私が驚いたのは、内村がキリスト教に入信する前から信仰者としての素質を十二分に持ち合わせていたことである。彼は日本にあるとされる八百万の神への深い信仰心を持っており、神社巡りをし、それぞれの神社で、それぞれ祈りを捧げていた。当時にしてもこのような若者は珍しかったであろう。日本の八百万の神に関する記述を読み、変な話ではあるが、学習面で優秀な生徒は一般の者と比べてやはり変わっているな、と感じた。私が万が一無宗教であったとしても、内村のような所業は到底不可能であっただろう。

第2章ではキリスト教との出会い、またキリスト教徒になった経緯が書かれている。内村は無理矢理入信させられる前からキリスト教に触れており、受け入れることを強要されることがない限り、むしろキリスト教に対しては心地よさを感じていたようだ。しかし彼は札幌農学校でキリスト教に強制的に入信させられる。この章を読んでいて、なぜ内村がキリスト教を受け入れ、熱心な信仰者へと成長していったのかはわからなかったが、一つわかったのは、唯一神を信じることにより、八百万の神に今まで誓った内容や規制から免れられることに関して、彼は非常に喜んだようだ。「真理はあなた方を自由にする。」という聖書の言葉を体現しているようだ、と私は感じた。内村の当時の日記も紹介されていたが、野犬の駆除を日曜日にも関わらず喜んで見ている場面などは、到底敬虔なクリスチャンのすることではない、と感じさせられた、と同時に内村も人間らしい一面を持ち合わせていることに安心もした。

第3章では内村のキリスト教生活が書かれている。友人としてエドウィン、チャールズ、パウロ、フランシス、フレデリック、ヨナタンが登場するのだが、その中でもパウロ、ヨナタンは聖書的なあだ名であるな、と感じた。ここでも同時の内村の日記が引用されている。

「六月十五日、日曜日 この地域の氏神の祭礼日。ひじょうに悩む。」とあるが、内村ほどの信仰者が何を悩む必要があるのか疑問を抱いた。これは日曜日にコンサートに行く私の葛藤と同じなのかもしれない。また、日曜日には何もしてはならないことへ対する内村の心情などが書かれている場面も多々あり、今のクリスチャンと比べ、律法主義的な面が強いな、

と感じさせられた。「安息日は人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」という聖書の言葉を思い出した。札幌農学校の生徒がキリスト教を受け入れ難かった理由の一つに日曜日に勉学に勤しむことができない、というものがある。勉強熱心なことである。しかし、日曜日にも勉強していた学生たちを差し置いて、日曜礼拝を守っていた内村達は成績優秀者上位 7 名を独占する。まるでダニエル記に登場する、菜食を守ったにも関わらず飽食の限りを尽くした他の少年達よりも血色、顔つきがよいとされたダニエルのような、と感じた。

第 4 章では内村自身の教会設立について書かれている。私がこの章で印象に残ったのは、武士家であり、神を軽んじていた内村の父が、キリスト教に胸を打たれ、聖書を熱心に研究し始めたエピソードである。この時の内村の喜びは書かれていないが、どれほどの喜びを感じていたかは想像に難くない。第 3 章で、内村は自身の家族がキリスト教へ改宗して救われることをどれほど願っていたかが書かれていたからである。

第 6 章からはいよいよ米国について書かれる。内村はキリスト教国として米国への憧れを持っていたが、米国の拝金主義や人種差別によって、むしろ米国は異教国だと感じ始める。紳士の身なりをしているにも関わらず神を冒瀆するような言葉を吐く男性に遭遇したり、内村の兄弟がスリの被害を受けたり、米国の印象は内村にとって良いものではない。スリをした犯人が地獄に落ちるように願った、と内村は記述しているが、大金を盗んだとはいえ、そこまで恨むのは信徒として如何なものかと感じた。その後も米国に対する絶望や内村自身の信仰についての考えも記述されている。

私は犯罪や悪が蔓延していることが信仰的でないことの証拠だとは感じないので、たとえ米国に渡ったとしても、内村のように米国を異教国である、とは思わないだろう。罪も汚れも見当たらないキリスト教徒よりも、元ヤクザであったり犯罪者であったりするクリスチャンに出会った時の方が、私は彼らをクリスチャンらしいクリスチャンである、と感じる。彼らは自分の行いによっては自分を救うことは出来ない、というキリスト教の原則を理解しているし、キリストへの愛が、聖人のようなクリスチャンよりも深いように見えるからである。2 人の借金を金貸しが帳消しにした時、金貸しをより愛するのは多くの借金を許された方である。勿論、聖書の教えを忠実に行う者のキリストへの愛が劣っている、と言っている訳ではない。「私の戒めを心に抱き、守る者は私を愛する者である。」と書かれている通りである。私は今述べた 2 通りの人間のうち、どちらにも属さない。前者にも後者にもなれるよう努力していく必要がある。

光文社 文語訳新約聖書

新約聖書とはどんな書物であろうか。聖書自体は様々な宗教の教典であり、世界で最も読まれている書として有名である。しかし、新約聖書、旧約聖書の違いはよくわからない、という人も多いのではないだろうか。聖書と言えばキリスト教、ユダヤ教のイメージが強いと

思われるが、キリスト教の教典が新約聖書であり、ユダヤ教の教典が旧約聖書である。キリスト教徒は旧約聖書にも目を通し、教えを重要視する。次に新約、旧約の「やく」は「訳」ではなく「約」である。これは神から与えられた「新しい約束」、「古い約束」という意味である。そして今回は「新しい約束」である新約聖書を読了した。

旧約聖書で預言されていた救い主イエスが誕生し、成長し、福音宣教を行い、最期贖いのために十字架につけられるまでの、イエスの一生を記録した福音書、イエスの復活後建てられる初代教会での出来事を記録した使徒言行録、パウロが諸教会に送った手紙、これからの未来について書かれた黙示録などから構成されている。

聖書の受け取り方には色々ある。聖書の内容は全て歴史的事実であるとする分派もあれば、一部のみ真実、または一部以外は真実であるとする自由解釈をする者もいる。確かに、聖書の内容は馴染みのない者にとっては、一部どころかほとんど信じられないであろう、と思わせられる奇跡が次々と登場する。水はぶどう酒に変わり、目は見えるようになり、死人も蘇る。リベラル派の中にはイエスの復活はなかったという者もいるが、常人がそう考えるのはむしろ正常であると言える。しかし、パウロはコリント全書 15 章 12 節の中で「キリストの死人の中より甦へり給へりと宣伝ふるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云ふ者のあるは何ぞや。もし死人の復活なくば、キリストも、また甦へり給はざりしならん。もし、キリストの甦へり給はざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん、かつ我らは神の偽証人と認められん。我ら神はキリストを甦へらせ給へりと証したればなり。もし死人の甦へる事なくば、キリストも甦へり給はざりしならん。...然ればキリストに在りて眠りたる者も亡びしならん。」と述べている。キリストの復活がもしなかったらキリストの復活について宣言しているパウロ達は偽証の罪に定められ、キリストに希望を抱いて死んでいった者達はそのまま亡びることとなる、というのだ。神の存在自体を否定する人に疑問を抱かないが、聖書の大部分を事実と捉えながら、死者の復活を否定する人には疑問を抱く。リベラルが悪いと言っている訳ではないが、リベラル派と保守派は相容れないものだと感じる。

誰でも知っている新約聖書の登場人物と言えれば誰であろう。イエスは勿論のこと、使徒、弟子の中ではパウロ、ヨハネ、ペテロあたりが有名ではないかと思う。その中でも私は特にペテロを偉大な人物であると考えている。大抵の人はパウロを挙げる。ペテロといえば、イエスを一度は裏切った人物として知られている。イエスに「あなたは鶏が二度鳴く前に、私を知らないと言った。」と預言され、自分の命惜しさに本当にその預言通り、三回イエスを知らないと言った。パウロであればここでイエスと死んでいただろうと私は思うが、ペテロの良さはそのような弱さがありながらも、イエスの復活後、命をかけて宣教活動に打ち込むことである。

ヨハネの福音書の最後、21 章で復活後のイエスとペテロが会話するシーンがある。イエスはペテロにこう伝える。「誠に誠になんぢに告ぐ、なんぢ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん」。

これはペテロがこれから宣教活動を経てどのように殉教するかについての預言である。私ならばこの言葉を聞いて震え上がるに違いないが、ペテロは違かった。死ぬことに対する恐怖からイエスを裏切った経験があるペテロであったが、この言葉を聞いた後、初代教会設立に多大な貢献をしたのはペテロである。人間としての弱さを持ちながらも使徒としての仕事を全うしたペテロは私にとって尊敬に値する人物である。勿論、生まれながらに勇気を持ち合わせているように見えるパウロも尊敬に値するが、ペテロの方が親近感はわく。

先程紹介した箇所近く、ヨハネ伝福音書 21 章 15 節から以下のようなやりとりがある。斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言ひ給ふ「ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか」ペテロ言ふ「主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんぢ知り給ふ」イエス言ひ給ふ「わが羔羊を養へ」。この会話は三回繰り返される。私はこの場面を読むと目頭が熱くなる。なぜイエスは他の者ではなくペテロに質問したのか、なぜ三回繰り返したのかを考えると感慨深い気持ちになる。またペテロが迷わず、私があなたを愛している事はあなたがご存知のはずです、と返事をしたことに感動させられてしまう。イエスを裏切った経験から躊躇いを生じてもいいはずであるのに、言い切るペテロには、これからどんなことがあろうとイエスに献身していこうと言う覚悟があったのではないかと私は感じた。

この他にも聖書の中には更に考えさせられる箇所が多くあるので、教養として一度は読んでみてほしい書物である。